

---

# ランサーズヘブン4 フィッシング戦争

ヒュンケル

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ランサーズヘブン4 フィッシング戦争

### 【Nコード】

N9974B

### 【作者名】

ヒュンケル

### 【あらすじ】

失われたランサーの楽園、この場所に次々と集う挑戦者たち。果たしてランサーの楽園は開放されるのか！？そして蠢く謎の陰謀！第6次聖杯戦争の幕開けか！？果たして士郎は、セイバーは、アーチャーは、この激戦に打ち勝つ事が出来るのか！！とまあ、あらすじは格好よくこんな感じで、この作品はFateのネタバレチックなネタがわらわらありますので、未プレイの方はご注意ください！もし知らない人が見たら、間違いなくデッドエンドに直行です！！相変わらず凄まじいあらすじっす！師匠おー！

(前書き)

注意

この物語はFate/stay night、及び、Fate/hollow ataraxiaの重大なネタバレなネタがうじやうじや蠢いています。

よって、Fateを知らない人、またはこれからプレイするという方は十分に注意してください！

というか絶対に注意してくださいなり〜。でない和不条理デッドエンドに直進なり〜。

空は快晴、

強い日差しは季節の感覚を麻痺させる

海風は頬に心地よく、ウミネコの鳴き声が寂しさを温和させてくれる

文句の付け所の無い絶好のロケーション

平和な冬木の町を象徴するかのような港はしかし……

もはや一つの戦争が起こりかねない状態へと至っていた。

「つてめっちゃ増えてるう〜〜〜!？」

意気消沈するランサー、相変わらずハイなテンションの赤い人、子供たちに囲まれて愉しそうな金ピカ。

それと

「くっ、まさかダブルアーチャーに釣りで押されるとは、シロウ、こうなればエクスカリバーを使います!」

「おい桜、何でさつきからワカメしか釣れないわけ? もし魚を一匹でも釣れなかったら夕飯は抜きなんだからな」

「が、頑張ってください兄さん、私、昨日から何も食べてないのでくっくうおながになります」

「皆に負けるわけにいかないからね、さあ、狂いなさいバーサーカ

「  
「—————!!!———!!!」

え〜と、順々に答えましょうか。

まずセイバー、エクスカリバー絶対に見目！ 海が干上がる！

それとワカメ！ じゃなくて慎一、ワカメしか釣れないのはお前の生まれながらの呪いみたいなやつだから諦める

それよりも間桐家の食生活はどうなっているんだらう？ 何故か

最近桜は家に来ていないようだが

そしてイリヤとバーサーカーさん、あんた等何してんのおー！  
ー！！？

「うおー、すげー！ ギル、人が凄いたくさんいるぞ！ 大会でも始まるのか！？ がんばれギル！」

「ギルギル、あそこの物凄い大きい人って本物かな？」

「ねえ、隣りの兄ちゃんの手、よく見るとワカメで出来てるよ、あれでワカメが釣れるなんてすげー、でもやっぱりギルの竿の方が金ピカでかっこいいな」

「ぎる、今月のガン ンどこ？」

「すごい、あの大きい人海の中に潜ってる、ねえギル、あの大きい人にサカナ投げていい？」

子供たちがはしゃぐ中我等がヒーローギルガメツシュは笑顔で答える。

「はっはっは、騒々しいぞ雑種ども。周りのオケラどもに迷惑である。」

それはともかく、ジロウ、この程度の人数で驚く事は無い、所詮勝者は我一人。

ミニ、人生ときには、見るもの全てが真実でないと知れ、我は怒らぬがあれにはあまりツッコムでないぞ。

イマヒサ、あそこのワカメは所詮ワカメ、その名の通りワカメで出来ているからワカメしか釣れぬのは必然である、だが嗜好はよし。



カーにやめるように命令してくれ、なんだかバーサーカー自身早くやめたいような目で俺を見ているのは気のせいか、やや足が震えている。

「でも、やり方が間違っているだけで、ようは魚を取っちゃえばいいんでしょ？ なら簡単よ、バーサーカー！ 背中から水を噴出すおっきな魚を捕まえなさい！」

「……………!!!??」

何でそうなる……………!?

しかしバーサーカー、さすがにそれは厳しいのか首を大きく横に振って否定した。

そうだろう、多分イリヤが言っているのはクジラの事だ、クジラとは哺乳類の中でもトップを誇る巨大な生物だ、いくら巨大なバーサーカーでも、まあ不可能とは思えないが捕まえるのは厳しいだろう、しかもクジラはもっと遙か先の海まで進まないといけないし!

「うう……………なによー、わたしに逆らうって言うの？ バーサーカーのバカあ!! もう知らないんだから!!」

「……………!!!??」

遂には泣き出してしまった、そうしてバーサーカーに怒りをぶつけて何処かに走り去ってしまったイリヤ、バーサーカーもさすがに予想外だったのか、海からジャンプして上がって陸に上がり、ドシンドシンと大地を震わせながらイリヤを追いかけていった。

バーサーカーが上がった時に水飛沫がまるで津波のように俺やまわりの釣りバカ軍団に直撃したのは言うまでも無い、俺のすぐ近くにいた赤い奴は離れたが。

それはそうとさすがに心配だ、イリヤにショックを与えたのなら後で誤ろう、うん、あくまで後でだ、今ならバーサーカーが励まし

ているだろうし、俺が下手に行っても首だけになって生き人形になってもおかしくはないだろう。

「ふん、嘆かわしいな、衛宮士郎、いたいけなイリヤを泣かせて更には謝罪にも行かないとは、貴様それでも衛宮士郎か！」

怒声の如き罵声を放つ俺の隣りの赤い人、どうでも良いがお前さつきまで逃げてただろ！ アーチャーは最新型のリールを投影しては自分のモノのように操り釣りまくっていた！ いや、まあ別にどうでも良いのだが、バケツの中のイナダやサバの大群は何だろうか？ まさかこいつが一人で釣ったと言うのか！？

「ふつ、驚く事はない、現在の戦況はランサー19匹、ギルガメッシュが24匹、そしてオレは26匹だ、はて？ よく数えてみると何故か20匹しかいないのは気のせいか？ と、27匹目（？）フイイイイツシュ！」

やけにノリノリな赤い人、おや？ そういえば遠坂は何処だろう？ まあこういう場所にはよく見かけないが、ここまで人が集まっているのなら興味半分で来ると思うが。

「つと、そういえば凜の奴、屋敷の中で変な宝箱の中に入って遊んでいたな、何だか嫌な予感がしたんであえて開けなかったが、今頃どうしているのか」

遠坂の奴またゼルレツチの第二魔法で作られた宝箱に閉じ込められたのか！？

今頃は例のステッキでおかしな事になってない事を祈ろう、って言うかアーチャー。あえて開けるよ！！

「シロウ、魚がまったく釣れません、どうした事でしょう!?!」

どうしたもこうしたもセイバーの釣り運が無いのだろう、勝負にこだわるセイバーはそれが許せないのか、いつの間にか甲冑を身に纏っている、まずい、戦闘モードだ!!

「くっそー、何でワカメがこんなに釣れるんだよ、それもこれも全部あのランサーの所為じゃないか、あいつが僕の愛用してた釣り竿さえ取らなければ、今頃はサバやタコが取り放題だったんだぞ!！」

そういえばランサーが使っている釣り竿って慎二のだけ、でも慎二、お前じゃいくら頑張ってもタコは無理だと思っぞ、ワカメ以外の生物を釣る慎二なんて慎二じゃない。

「うっ……先輩、もう限界です。さっきからくっくっおながかなります」

気持ちは判るぞ桜、だからって何故赤と黒のストライプの衣装を着ている! 明らかにヤバイオーラが吹き出てますけどー! って桜、お前の影が赤いアーチャーのバケツに大量にいる魚を一匹一匹食っているぞ、というか。

お前か、アーチャーの魚を勝手に食ってたの。

食べるのは油断している金ピカで充分だよ。

「ギルギルーあっちの赤いのにまけてるよー」

「ぎるー、ガンンまだー?」

「ギルー、あっちでたそがれてるお兄ちゃんには勝ってるね」

「ふはははははは!!! 贗作に遅れを取るのには屈辱極まりないが、

まずは狂犬を倒した、残るは贗作を追い抜くのみ！ セイバー、我を応援しろ！ そしてカンタ、ガン ンはいま少し待て」

誇り高く高笑いをする英雄王。ガン ンくらい早く読め。

「……………俺の楽園……………」

ランサー、ドンマイ…………

ランサーがやけに可哀想だが、少しこの状況はいただけでないな、このままだとオチがまったく見つからないじゃないか。一旦少し場を静めないと、さてどうしたものか……………と、その時。

「皆の者、少し待て！……！」

突如、何処からとも無く響いた男の声、皆が一斉に釣りを止め、声の方を振り向いた、その場所は俺の背後にいた、俺も恐る恐る後ろを振り向き、この戦争状態を止めた英雄を 見た！！

「フー、フー、フー、はむ、ほ…………ふむ、はふ、は…………フー、フー、ふむほむ！」

何故そこにあるのか、高級レストランに置いてありそうなテーブルクロスが敷かれたテーブルの上で、物凄い形相で物凄い息遣いで、かつかつと蓮華を動かす、そんな音を立てて麻婆豆腐を食べる一人の男！

「ふー、ふー、ふー、…………皆の者、ここはまず私の提案を聞くと良

い  
「

麻婆豆腐と言えばこの男、聖杯戦争の管理役にしてFate本編のラスボス率ナンバーワンのこの男、言峰神父だ！。

何で生きてるのアンタ！？

この場の全員が思ったのは言うまでもない、だがそんな疑問もど  
うとは思わないのがこの作者の思想、ギャグコメディの掟、Fate  
の醍醐味！（？）

言峰が麻婆豆腐を高速で食べ終わると、何食わぬ顔でこの場にいる  
全員に告げる。

「…さて、さすがにこの荒れ模様は些か見過ごせないな、いわんや、  
聖杯戦争が終わったとは言え、やはりサーヴァントたちの戦闘意欲  
は衰えず、か

よかるう、そこまで言うのならば、この私が宣言してやるう、今ここに、第一次フィッシング戦争を開幕する！」

「な、何だつて！？」

いや皆、別にそう驚く事も無いのでは、とは言っても俺も驚いたが、まあとにかくこの状況をまとめるには相応しく、そして的確な判断だ言峰。

「説明しよう、今から二人一組のペアを作り、一時間以内により多くの魚を釣ったペアが一位と、至って簡単なゲームだ、じゃなくて戦争だ。ちなみにペアは私が今いるメンバーを見て平等に考えてみた」

なんと手際の良い神父だろうか。さすがだぜ麻婆神父、伊達にラスポスやってないな。

ちなみにペアは確かに平等だ、何故か俺も入っているが、俺はセイバーとペアを組むようだ、そして慎二は桜と、金ピカことギルガメッシュはアーチャーとだ、そして楽園を失ったランサーは人数が足りないのか、何故か言峰とペアを組む事になった。

「待て言峰、なぜ我が贖作と組まねばならん！ 我は一人で充分だ、どうしてもと言うのならカンタやミニとペアを組む！」

子供好きな英雄王はアーチャーと組むのが嫌ならしい、まあ確かにギルさんはアーチャーにトドメをさされたからな！。

「ふん、オレもお断りだな、傲慢な英雄王と組むなど、これならば一人でやった方がマシだ」

「何だと？ 我を傲慢と呼ぶか鷹作！ セイバールートでは雑種に無駄な入れ知恵をして狂人に討たれた分際で！」

「あれを馬鹿にするか？ 確かにあれはセイバールート唯一の活躍だがな、あの場面を侮辱するなよ英雄王、そういうお前は桜ルートで油断して退場したではないか」

「ぐう、あれは……まあ我の失態だ とにかく！ 言峰変更を要求する……！」

嫌な言い争いだ、どうでも良いがアーチャーの方はカツコイイ塵ざまだが、それに対し英雄王のはなんだあの体たらくは、桜には悪いが、どうせなら宝具の全てを出し切っても倒せ。

まあとにかく、一度決めた事を言峰がそう簡単に覆すわけ

「……判った、そこまで言うのなら、ギルガメッシュはセイバーと組め、アーチャーは衛宮士郎と組め」

「「なっ!?!」」

驚きの声は俺とセイバーだ、セイバーが本気で困り怒った表情をする。

「何故だ言峰綺礼!? 何故私がギルガメッシュと組まねばならない! 既にシロウと組むと決まったのでは!?!」

「そつだ言峰! 何でよりもよってアーチャーと組まなきゃいけない!?!」

「それはこちらのセリフだ、言峰、こんな理想しか追い求めぬ偽善者と組まねばならん!?!」

「いいや! いいや良いぞ言峰!?! 我は貴様の考えたペアに賛成

だ、褒美に後に黄金の湯船を提供してやろう！」

「なあ言峰、どうでもいいがなんで俺がお前と組まなきゃならねえんだ？」

「ふん、一応は貴様のマスターだからな、先程カレンからマスターの権利を譲ってもらったのだ」

「あっそうかい、どうでも良いが、俺はあんまりやる気は無いぜ、やりたきゃ一人でやってな」

俺たちの反論を（金ピカは大賛成だが）完全無視し、ランサーと何やら話していた。

「ふむ、それでも良いが、いいのかランサー？ このフィッシング戦争に優勝すれば、この楽園とやらをお前一人だけにしか使わせないが」

「なっ ……！？」

その言葉にランサーの表情が変わった、あの表情はゲイボルクを構えて投げるか突くか、その直前の表情、いつ懷からゲイボルクが飛び出してくるか判らないぜ！ とにかく先程まで死に体のようだったランサーの表情に活力が戻ったのは言うまでもない、そして。

「いいぜ！ その提案に乗ろうじゃねえか！ なら始めよう、とつとと始めよう！ あの貧窮王子とコピー野郎、それにセイバーの小僧と大食い王と、ワカメと怖い嬢ちゃんをぶっ倒すぜ！！」

「ふむ……では、これで準備は良いかな？」

『良くない！！』「さっさと始める雑種どもー、ゆくぞセイバー、我等の愛を見せる時ー」

俺たち三人と喜ぶ英雄王が騒ぐ中、間桐の仲良し兄妹は。

「くすくす、兄さん、あれほど言ったでしょう？ 私の部屋には入らないでって」

「え……いや、あれはほら、兄ちゃんたまには桜の部屋を掃除しないーって出来心で、ほら、いつもお前には迷惑かけたし、だから別にやましい事はしてないはずですよー！ー！ー！」

「でも、だからってどうして私が部屋に入った時、私の日記帳を見てたのかしら？」

「え あ、あれはほら、たまたま掃除している時に出てきて、ちよつと興味があったらか……」

「なら何で掃除道具が一つもなかったのかしら？ ねえ、ワカメ」

「ヒイヒイヒイ……！ー！ー！ー！ー！ー！ うわあああん衛宮……！ 桜が僕を兄さんって呼ばなくなった……！ー！ー！ー！ って影が、影が迫ってます……！ー！ー！ー！」

いつの間にか慎二に不条理デッドエンドが発動していたが、そんな事は関係なしに、第一次フィッシング戦争が幕を開けた。

開始10分、早くも先制するはランサー&言峰ペアは今10匹目を釣り上げていた。

「はっはっは！ どうだ？ 俺様の力、思い知ったか……！」

「ふむ、もう10匹目か、しかも釣り上げているのはランサーばかり、これは力の差がついたか、まだ他のペアは一匹二匹と少ないようだな」

ランサーの猛攻にセイバー&金ピカペアと俺とアーチャーペアはかなり焦っていた、え？ 桜と慎二？ ああ、あの二人は仲良くじやれあっているよ、仲が良いのは美しいかな、桜の影が慎二の体を持ち上げている。

「くそ、ランサーめ、ここに来て遂に本領を發揮したか！ どうした衛宮士郎！？ 貴様の力はその程度か！？」

「そういうお前こそなんだよ、さっきまで面白いように釣れてたじやないか、所詮最新型のリールもお前の投影じゃ旧型にまで落ちるってか？」

「ほう、そういうおまえこそオレと同型機を投影しておいて何を言う、所詮、無謀な理想を追い求めるが故の行動だろうが、それが命取りだぞ衛宮士郎！」

「っ、うるさい、少し黙ってる！」

「ふん、言い返せなくて逆ギレか、まったく、お前の親の顔が見てみたいものだ」

あんたも知ってるだろうが。

「っと、そんな事を言っている間に、3匹目フイフイフイッシュ！」

「な、何でアンタだけさっきから釣れているんだ、同じリールなのに」

「無様だな、これが技量の差だ、これがアングラーたるオレの力だ」

さあ、衛宮士郎

「なんだよ」

「 ついて来れるか? 」

「 アングラの道にか!? ついて行けるか! ってか追い抜きたくもないしついて行きたくもない! 」

そんな名言の一つを言っても、何が悲しくてアングラの称号を得なければ行けないのだ はっ!?

まてまて、こいつの未来がアングラなら、俺もいつかこんな釣り好きになっちまうのか!?

認めない、認めるわけにいかない、絶対にこいつは認めないぞ!

俺は、俺を信じて突き進むから!

「 ぬう、何を勘違いしているのか知らんが、お前もかなりの釣り好きに見えるがな 」

「 う、うるさい、つべこべ言わずに釣り続けるぞ! 」

そして俺たちから離れる事数メートル、子供たちに囲まれながら不機嫌そうに釣りを続けるセイバーと満足そうなギルガメッシュ。

「 ギル、そつちの姉ちゃん不機嫌じゃない? 」

「 ぎるー、先にガン ン読んでるねー 」

「 ギルギル、まだあんまり釣れないねー 」

「 はっはっは、馬鹿を言う出ないぞコウタ、セイバーは上機嫌ではないか 」

コウタ、我より先にガン ンを読む気か! だがその度胸は良し、コウタの英雄王を恐れぬ心に免じて許してやるう、さあ読め!

ミミ、たまには大逆転をするのも美しいであろう、見ておれ、こ

れからセイバーと共に魚の山を作ってやろう」

子供たちに応援されるたびに上機嫌になる英雄王、対する騎士王は不機嫌オーラ全開、何だか頭のクセ毛が小さく見えるのは気のせいだろうか？

「まったく、何故私が英雄王とペアを組まねば」

「わははは、恥ずかしがるなセイバー、勝利の暁にはズワイガニを一匹授けよう」

「な……あのカニの中でも頂点に君臨するあのズワイガニをですか！？ わ、判りました英雄王、ここは一時手を組みましょう！」

「良きかな良きかな、では行くぞセイバー、鷹作コンビと狂犬と言峰を倒すぞ　む？　ところでセイバー、どうした？　そのアホ毛は、おまえのチャームポイントが落ちかけているぞ、よし、我が直してやろう！」

あろう事かセイバーのクセ毛を触ろうとする命知らず、もちろんただで触られるセイバーではなかった、すでに先程から甲冑を着ていて、今度はいつの間にか構えていた不可視の剣から眩い光が噴出す。

「む、むむむむむむむむ？」

いや待てセイバー、何故エクスカリバーの準備をしておる？　な、待てセイバー、何か我が気に障ることでも」

「死ぬ！　ギルガメッシュユー！！」

「  
約束された」



「この三倍の数の魚を持ってこい!!」

「どうでも良いですがギルガメツシユ、三倍も持ってこられると、あと三発エクスカリバーを放たなければ勝てませんよ」

「くう、その程度心得ておるわ!! さあどうする鷹作、それとも諦めたか? それもまた良し、残る敵はランサーと言峰のみだ!」

諦める? なんでさ、まだ俺たちが諦めたなど、どっちも言っていないはずだ。

良いだろう、英雄王、そこまで言うのなら見せてやろう、俺たち、ダブル投影の実力を!!

「ふん、仕方が無い、一時的にだが、本気で力を合わせるぞ、土郎!」

「判っているよ、いくぞ、アーチャー!」

お互い釣り竿を持ち、目を合わせてお互いのやるべき事を確認する。

もはや準備は整った、相容れぬ二人のエミヤ、その二人が今始めて共闘を得た!

「体は釣り竿で出来ている」

I a m t h e b o n e o f m y p h i s h i n g

「ぬう!?!」

ギルガメツシュが動揺する、同じくセイバーも焦る。

「この体は、無限の釣り竿で出来ていた!!」  
「My whole life was “unlimited fishing works”」

「むっ!?! これは!?!」  
「な、なんだあ!?!」

ランサーと言峰も動揺する中、俺たち二人は呪文の詠唱を終えた、刹那、炎が俺たちの周りを走ると、世界は一変した。

生物など存在しない世界、あるのは大地に突き刺さった釣り竿のみ。

固有結界

これが、衛宮士郎とアーチャーこと英霊エミヤにのみ許された魔術、禁呪中の大禁呪  
その名を

『アンリミテッドフィッシングワークス  
無限の竿製』

釣り竿の丘に呼び込まれたセイバー&ギルガメツシュ、そしてランサー&言峰。

俺たち二人は悠然と竿の丘の中心に立ち、敵を睨む。

「これは 固有結界!?! これが貴様らの能力か!?!」

ギルガメツシユが叫ぶ、隣りに身構えていたセイバーも厳しい表情をして俺たちと対峙する。

「く、ここまでして勝利を勝ち取りたいのですか!?! シロウ! アーチャー!」

そしてもはや蚊帳の外となってしまうたランサーと言峰は。

「わー、凄いや言峰、どうでもいいけどよ、早く出してくれねえかな?」

「ふむ、竿の丘なのは判ったが、果たしてどうやって釣りをするのだ?」

俺とアーチャーは真剣そのものだ、ギルガメツシユとセイバーを睨み、アーチャーが言う。

「答えは得た、大丈夫だよセイバー、俺も君もいずれ救われるさ」

「どうでも良いですがアーチャー、釣りは何処ですのですか?」

「ッ!?!」

「いくぞ英雄王 釣り竿の貯蔵は充分か」

「ハーハッハッハ!! 笑止、この我を超える気か雑種! 贗作が原典に勝てると思っているのか!?!」

もう何が何だかわかりません、そんな表情で事の成り行きを見守るランサーと言峰、そんな中、二人はそれぞれ、ぼそっと呟いた。

「……俺の楽園は……」

「……何故か、勝負の趣旨が変わっていないか？」

もはや釣りなど関係なしの本気の聖杯戦争がはじまろうとする中、ギルガメッシュの手にはいつの間にか士郎とアーチャーでは投影不可能の最強の剣が構えられていた！

「ゆくぞ雑種！ 王たる我の力を見せるのは不愉快だが、致し方ない、エア！ おまえの力を見せる時！」

「はっ！？ しまった、釣り竿ばっかで剣がない！ ってなんで戦う気満々なんだあんたはー！」

「愚かだな衛宮士郎、よりもよって釣り竿の丘など作りおって、純粹に釣りを楽しめばよいのに」

そう言うアンタも一緒になって呪文詠唱してたろ。

っとそれよりも黄金のサーヴァントがああ宝具を俺目掛けて放とうとしています！

『エヌマ 天地乖離す』

「ぬ、シロウ！」

セイバーが叫ぶ。さて、俺も何か武器を っで何でこんな世界を作っちゃった俺とアーチャー！

デッドエンドが発動しそうな中、ギルガメッシュは放つ。

「開闢の星<sup>エリシユ</sup>

！！」

まずい、明らかに破滅の光が俺に放たれた、だが、俺の目の前に一人の男、アーチャーが背を向けて仁王立ちし、俺に首だけを向け

「ついて来れるか？」

「アンタ馬鹿でしょ！！」

そして二人とも死に直面した。その時、破滅の空間断裂攻撃が一本の鞘によって防がれた。

「<sup>アヴァロン</sup>全て遠き理想郷

！！！」

あらゆる干渉を遮断する無敵の守りは、エアによる空間断裂さえも防ぎきる！

「おのれえ その程度の小細工で————！！！」

鞘で防ぎながら、セイバーの手には黄金の剣が構えられていた。



釣り勝負など忘れてしまった俺たちを遠くから眺める、失った楽園の王者ランサーと麻婆豆腐の言峰神父は

「……………何だ、このオチは」

「俺の楽園はどうなるうううう」

「!!」

その頃、港では。

「うわー、ギルたちが消えたよー何処にいつちやっただらうー?」

「ねえねえ、あの大きな影はなんだろう? ワカメのお兄ちゃんが死にそうだよー」

「って言うか死んでるんじゃない? どうでも良いけどガン ン面白いなー」

「すごい、マジックだマジック!」

「がんばれワカメ ! 負けるなワカメ !」

「くすくす、兄さん、さようなら」

「ひひひひひひ!!! 誰かー!!!??」

ランサーの楽園は、今日も波乱続きでした。

## ランサーズヘブン4 フィッシング戦争

(後書き)

タイガー道場

リン「……出番はなしか」

ブルマ「先輩、ドンマイッス！ あたしらも出番なしです！」

リン「シロウ殺す」

ブルマ「何の脈絡もなく殺人宣言とは、さすが先輩ですう！ 弟子

一号、感動しましたあ！」

タイガ「っていうか、結構ネタが凄いわね、確かにFateを知らない人は注意したほうがよいわねってことで、またいつか、何処かのデッドエンドで会いましょう、またねー！」

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9974b/>

---

ランサーズヘブン4 フィッシング戦争

2009年6月15日18時32分発行